

東日本大震災被災者支援企画

盛岡バッハカンタータフェライン ステージマネージャー 田澤 隆
岩大ボランティア部 有志一同

1) 企画主旨

私がボランティア活動を通して、逆に様々な事を教えて頂いた田老町の方々に恩返しと感謝の気持ちを込めて、そして被災された方々へささやかですがお見舞いとお冥福をお祈りし、気分転換になればと思い企画させていただきました。

私が所属する合唱団が盛岡でチャリティーコンサートを催すことになり、そのコンサートに被災者の方々を招待しようと思っております。予算の関係もあり、50名程度の招待となりますが被災者の方々に、我々が端正に創りあげた音楽を通して、勇気と希望を持っていただければ幸いです。そして、共に手を携えて困難に立ち向かえればと思います。

2) 企画内容

盛岡バッハカンタータフェライン主催 チャリティーコンサートへのご招待

演奏日時 : 2011年06月19日(日) 15:00開演

演奏会場 : 都南文化会館キャラホール

指揮 : 佐々木正利

プログラム :

J.S.バッハ モテット 2番 BWV226

J.S.Bach / Motette BWV226 "Der Geist hilft unser Schwachheit auf "

W.A.モーツァルト レクイエム ニ短調 KV626

W.A.Mozart / Requiem KV626

※オルガン伴奏によるモーツァルトのレクイエム

独唱 :

村元 彩夏 (ソプラノ)

谷地 畝晶子 (アルト)

鏡 貴之 (テノール)

佐々木直樹 (バス)

オルガン : 飯 靖子、平井良子

合唱 : 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

主催 : 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、IBC岩手放送

3) 招待者

被災された方々全てを招待できればよいのですが、予算の都合とクラシック音楽であることから、小学生以上の希望者、先着50名様とさせていただきます。

4) スケジュール

8:30 グリーンピア三陸みやこ 多目的アリーナ出発 トイレ休憩1回
11:30 昼食・お買い物 イオン盛岡南ショッピングセンター
※イオン様のご厚意と義援金より少額ですが、お買物券を用意しました。
ショッピングセンター内の全てのお店で使用可能ですから、お食事・お買物が楽しめます。
14:00 イオン盛岡南ショッピングセンター発
14:30 盛岡市 都南文化会館 キャラホール着
15:00 演奏会開演
17:00 演奏会終了
17:30 盛岡発 お弁当 トイレ休憩1回
20:30 グリーンピア三陸みやこ 多目的アリーナ着 解散

5) 送迎バス

株式会社ヒカリ総合交通様(久慈市)からご配慮をいただき、最新のバスを出していただくことになりました。道中もゆったりとお過ごしいただけると幸いです。

6) お問い合わせ・お申し込み先

グリーンピア三陸みやこ 多目的アリーナ内

松本 龍児 様 まで

Charity Concert

～東日本大震災の犠牲者に捧ぐ～

モーツァルト・レクイエム演奏会

ごあいさつ

代表 茂木 容子

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。

東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

あの3月11日から私たちの生活は一変してしまいましたね。

内陸部に住む私たちが、電気の無い数日を「たいへん」と思って食料、明かりや暖房をなんとか確保しようと必死に動いていた頃、沿岸部の皆様は、津波により言葉では言い表せない恐怖と悲しみと不安の中におられたのです。私は、電気が通じてから初めて見たテレビ映像に本当にびっくりし、この震災が未曾有のものやっと認識したのです。このことを考えると今でも心が痛みます。被災地は、少しずつながら復興してきているようですが、3ヶ月を過ぎた今もお避難所に暮らしている被災者のかたも数万人と聞いております。一日も早く被災者の皆様に普通の生活が戻ってくることをお祈りするばかりです。

同じ地域に住む私たちは、被災地の皆様のために何ができるか考えない日はありません。そして、それぞれの方が少しずつ様々なことを日々実行していることと思います。この大震災は、私たちの価値観を変え、本当に大切なものは何であるかを気づかせてくれました。それは生きていくために本当に必要なものはなんであるかともいえるでしょう。私はこの思いを心に留め、前を向いて歩いていきたいと思っています。希望を失うことなく持ち続けられれば必ずよいことが待っていると確信しています。

このような状況に私たちは、合唱活動をしているものとして「何ができるか?」と考え、本日の演奏会を企画いたしました。大震災で亡くなられた多くの方々の御霊が安らかであられますように、また、大切な、ご家族を、ご友人を、お仲間を亡くされた皆様が、ひとときでも音楽の力によって心穏やかな時間を過ごされますように、ステージから心より願って演奏いたします。客席の皆様のお力をお借りできましたならば、きっとホールに満ちた願いが目的地まで届けられることと思います。

どうぞ最後までごゆっくりお楽しみくださいませ。

なお、演奏会の差益、会場での募金、当会メンバーからの篤志は、当会と共に今回のコンサートを主催しているIBC岩手放送（IBC震災募金）を通じて、東日本大震災の義捐金として寄附いたします。

寄附の報告は、当会ホームページ（<http://www.mbkv.jp/>）に掲載いたします。

また、お問い合わせは、電話（019-665-1614 / FAX共用）でお受けいたします。

マエストロ・ダンからのメッセージ

親愛なる盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの皆様

昨年12月、皆様とベートーヴェンの第九を演奏したのは、私にとってとても特別な経験でした。東京から離れた美しい盛岡で開催されたというだけではなく、東北地方のアマチュア・コーラスの方々と共演できたというのも、私にとってはめずらしい事でした。

ですから、皆様のお近くで地震と津波が起きたと聞いて、私がどれほどショックを受け、心がかき乱されたかお分かりいただけるでしょう。ニュースで仙台という名前を聞き、12月の公演には仙台からも参加している合唱メンバーがいらっしゃった事を思い、このニュースが突然個人的な意味を持ち始めたのです。皆様の事を知っていたせいで、ニュースの重みが全く違うものになりました。

この5月にはドイツに公演にいらっしゃる計画が、こうした状況のためにできなくなったと伺い残念でした。私も何うつもりだったのです。

いつの日かまた、共演する機会を見つけられる事を願っています。皆様の音楽への愛が、ポジティブな気持ちを持っていつもの生活に早く戻れる助けとなる事を願ってやみません。

2011年6月7日

ダン・エッティンガー
東京フィルハーモニー交響楽団常任指揮者

Message from Maestro Dan Ettinger to the Morioka-Bach-Kantaten-Verein

Dear Friends of the Morioka-Bach-Kantaten-Verein,

I had a very special experience performing Beethoven's 9th Symphony with you last year.

Not only because it took place in Morioka, a beautiful city far from Tokyo, but also because the choir consisted of amateur chorus groups from the Tohoku area, which is an opportunity I don't often have.

You can probably imagine how shocking and devastating it was for me to hear the news of the earthquake and tsunami, especially in your area. When I heard the name, Sendai, in the news describing the disaster, I remember that some of the chorus singers in our December performance came from there. The news had a personal meaning to me. It made such a difference as I knew you all from the area.

I was sorry to hear that the circumstance prevented you from coming to Germany to perform a concert this May, as I was planning to join you then.

I hope that we will find an opportunity for collaboration in the future. I hope that your love of music will be one of the ways to help speed your return to everyday life with positive spirit.

Sincerely,

Dan Ettinger

Chief Conductor of the Tokyo Philharmonic Orchestra

June 7, 2011



佐々木 正利
〈指揮〉

東京藝術大学音楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元（声楽）、服部幸三（音楽学）、小林道夫（演奏法）、森明彦（発声法）、松本民之助（作曲）、岳藤豪希（宗教音楽）の各氏に師事。

1973年にバハ「クリスマス・オラトリオ」の福音史家で楽壇デビューして以来、バハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。1979年シュトゥットガルトに渡りL.フイッシャー教授に師事。1980年第6回ライブツィヒ国際バハコンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H.クレッチマール教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に1980年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP.シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、世界、日本の著名なオーケストラのソリストとして度々起用され、K.マズア、H.シュタイン、H.プロムシュテット、小澤征爾等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また宗教音楽の名指揮者として名高いH.リリング、H.J.ロッチュ、M.コルボ、R.ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を得ている。

特に世界的バハ指揮者H.ヴァインシャーマン率いるドイツ・バハバグステンの演奏会には、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。

1975年、1985年ザルツブルク音楽祭に招聘され、モーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊とバハ「マニフィカート」、モーツァルト「戴冠ミサ」を共演し好評を博した。在独中オペラでは、ヴェストファーレン州立歌劇場等で、「コジ・ファン・トゥッテ」のフェランド、「フィダリオ」のヤッキーノ、スカララッティ「グリゼルダ」のコラード役で出演。現在までリサイタル29回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

1970年東京藝術大学バハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てると共に指揮者としての活動を開始。以後約30数年に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バハ・カンタータ協会等を率いての20数回に亘るヨーロッパ公演では、『シュツツ、バハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、1993年のヴァインシャーマンとのマタイ受難曲では『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また1995年のJ.ツィルヒとの天地創造では『音楽と言葉との見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。

1987、88年には、リリング音楽監督のバハ・アカデミーにてTen.マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。

1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞（学芸部門）が贈られ、また2000年にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。

現在岩手大学教育学部教授。岩手大学教育学部附属小学校校長。二期会会員。日本声楽発声学会副理事長、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会副部長、仙台バハ・アカデミー理事。盛岡バハ・カンタータ・フェライン指揮者。仙台宗教音楽合唱団、岡山バハ・カンタータ協会、東北大学混声合唱団、東京21合唱団、岩手大学合唱団、各常任指揮者。山響アマデウス音楽監督。二期会バハ・バロック研究会講師。

声楽ソリスト



村元 彩夏
〈Ayaka Muramoto / ソプラノ〉

青森県出身。岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学音楽学部声楽科を経て、同大学大学院修士課程独唱専攻修了。現在、同大学大学院博士後期課程1年に在籍。第20回友愛ドイツリートコンクール第1位、ならびに文部科学大臣賞受賞。その副賞として2010年3月、ウィーンにてリサイタルを行った。JT主宰による「期待の音大生によるアフタヌーンコンサート」にてミニリサイタルを行う。朝日新聞社主催、第60回「芸大メサイア」のソリストを務める。これまでに、J.S.バッハの教会カンタータや《クリスマス・オラトリオ》、ヘンデル《メサイア》、ハイドン、モーツァルト等のミサ曲、モーツァルト、フォーレ《レクイエム》等のソプラノソロを務める。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、秦貴美子、寺谷千枝子の各氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、東京21合唱団に所属。



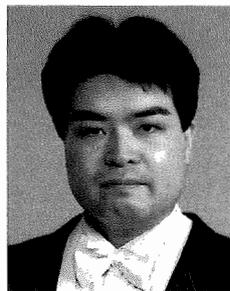
谷地畝 晶子
〈Shoko Yachiune / アルト〉

岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京藝術大学大学院音楽研究科独唱科修了。現在同大学院博士後期課程2年次に在学中。第16回日仏声楽コンクール第1位。第57回芸大メサイア、第28回 台東区 第九のアルトソロを務める。オペラでは第54回藝大定期オペラ、ヴェルディ「ファルスタッフ」のクイックリー夫人を務める。また、J.S.バッハ「クリスマスオラトリオ」、教会カンタータ、ヘンデル「メサイア」、ヴェートーベン「第九」、メンデルスゾーン「パウロ」「エリヤ」等においてアルトソリストで出演している。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、磯貝静江、朝倉蒼生、伊原直子の各氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



鏡 貴之
〈Takayuki Kagami / テノール〉

岩手大学卒業。東京藝術大学大学院修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ.S.バッハの作品では、「クリスマス・オラトリオ」「ヨハネ受難曲」「ミサ曲口短調」や多数の教会カンタータのソロを務め、活動の中心となっている。これまでにヘルムート・ヴァインジャーマン、ハンス・マルティン・シュナイト、鈴木雅明、ヴォルフ・ディーター・マウラーなどの著名な指揮者と共演して高い評価を得ている。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。日本声楽発声学会会員。東京バッハ合唱団、東京・ムジーク・クライス合唱団、各ヴォイストレーナー。バッハ・コレギウム・ジャパンに所属。



佐々木 直樹
〈Naoki Sasaki / バス〉

釜石市出身。岩手大学教育学部卒業後、東京藝術大学音楽学部声楽科を経て同大学院修了。声楽を小原一穂、佐々木まり子、佐々木正利、故伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。2001年藝大定期演奏会メンデルスゾーン「エリア」、2002年藝大メサイア公演、2007年島根県民「第九」コンサート、2009年岡山市芸術祭「第九」演奏会など、多くの演奏会においてソリストとして活動。また、バッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとして、数々の演奏会・録音に参加。2003年～2006年、岩手大学教育学部非常勤講師。現在、島根大学教育学部准教授。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベツヒライン、日本声楽発声学会各会員。



飯 靖子
〈Seiko Ii / オルガン伴奏〉

桐朋学園大学ピアノ科卒業、国立音楽大学大学院オルガン科終了。ピアノを野辺地勝久、高良芳枝、オルガンを吉田實、左近和子、チェンバロを鍋島元子、作曲を末吉保雄の各氏に師事。8回にわたり渡独し、オルガンをH.ケストナー、W.シュテリヒの各氏に師事。ソロ活動のほか、室内楽や宗教曲のオルガンパート、合唱伴奏、新曲演奏、NHK-FM出演など幅広い分野で活躍。礼拝音楽と教会音楽のための機関誌『礼拝と音楽』（日本基督教団出版局）の編集に長年携わっており、多くの手稿、楽曲を提供。「讃美歌21」によるCDシリーズの編曲・オルガンを担当。『「讃美歌21」による礼拝用オルガン曲集』全6巻を監修。『こどもさんびか改訂版』改訂委員をつとめ、伴奏譜を編集。霊南坂教会オルガニスト、聖歌隊指揮者、青山学院大学オルガニスト、同大学第2部聖歌隊指揮者、ルーテル学院大学、拓殖大学、洗足学園音楽大学講師。(株)パックス・アーレン主催パックス音楽院講師。日本基督教団賛美歌委員会委員。日本オルガニスト協会会員。東京21合唱団音楽監督。



平井 良子
〈Yoshiko Hirai / オルガン伴奏〉

桐朋学園大学卒業。オランダ弦楽四重奏、マルティヌー弦楽四重奏団、ウィーン木管五重奏団、東京ニューシティー管弦楽団、東京多摩交響楽団と共演。マスター・プレイヤーズ国際音楽コンクール“オーナー・ディプロマ賞”受賞。サントリーホールにて、ジョイントコンサートに出演。東京、盛岡市、北上市にてリサイタル開催。現在小学校、福祉施設にて、訪問演奏も行っている。現在、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン伴奏者を務める。



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
〈Morioka-Bach-Kantaten-Verein / 合唱〉

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「<言葉が生きる>と<音楽が生きる>とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロツチュ、J.ツィルヒ、岩城宏之、K.マズア、H.リリング等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、特にドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する（ニュルンベルク交響楽団）同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

2010年1月、盛岡においてH.リリング指揮、オーケストラ・アンサンブル金沢による管弦楽との共演でバッハ「ミサ曲短調」を演奏し大きな感動を呼んだ。本年5月には有志によりドイツ・ローテンブルク等での演奏旅行を計画していたが、東日本大震災の影響により中止のやむなきに至った。モーツァルトの作品への本格的な取り組みは、今回の演奏会が最初となる。

「祈る」ということ

人は洋の東西を問わず「祈る」という文化を生きました。人間の力の及ばないことを力あるもの(「全能の神」であったり「自然神」であったり…)に強く願うこと、この「祈る」行為は、その願いが強ければ強いほど「心の底から」湧き出てきます。意図していないのに心の中に生まれ膨らむその感情によって起こされる行為です。

「罪深い人間、我をあわれんで下さい。」

「私たちの弱さを助けて下さい。」

「亡くなった方に永遠の安息を与えて下さい。」

今日は3つの願いを、祈り、歌います。

《第1章 オルガン前奏曲》

《第2章 主よわれをあわれみ給え》

これらの曲は、全9章から成る同名の「交声曲」からの抜粋です。1965年に出版された楽譜の前書きで作曲者の大中寅二さん(1896-1982)は作曲の動機に関して、カトリックのミサの「ことば」(ミサ通常文)に準ずるものでプロテスタントのものとして歌いうる「ことば」を欲していたところに守山ふみかさんがそのようなものを書いてくれた、と記しています。

第1章はリード・オルガンのために元来作曲されたものです。続く第2章はミサ通常文の「キリエ・エレイソン(Kyrie eleison)」にあたる位置づけです。前半部では、原罪[注1]を負って生まれた人間「われ」の苦悩を歌います。後半部はこの曲のテーマである「主よわれをあわれみたまえ」という「ことば」を何度も繰り返して願い、祈ります。

《御霊はわれらの弱きを助けたもう》BWV 226

J.S.バッハ(1685-1750)が作曲したモテット[注2]の中で唯一、成立過程がはっきりしている作品です。バッハが長くつとめたライプツィヒの聖トマス教会附属学校のJ.H.エルネスティ校長の葬儀で演奏されました(1729)。

曲は第1部の二重合唱の部分と第2部のコラルの部分から成

っています。第1部のテキスト(歌詞)は聖書の「ローマ人への手紙」[注3]の第8章第26-27節で、イエス・キリストを信じる者の中には神の霊が宿り、その霊が私たち人間を助け導いて下さるのだ、といった内容が歌われます。音楽的にはさらに3部分に分けられ、ホモフォニック[注4]な二つの合唱(計8声部)の掛け合いで始まりながら中間部ではポリフォニック[注5]な音楽に変化し、次第に5声部にまとまっていき、後半部は4声でのポリフォニックな展開となります。

第2部は4声部のコラルです。大切な人を亡くすという苦難に押し流されないように私たちを強めて下さい、と主なる神に祈り、また確信します。

《レクイエム》KV 626 ジュースマイヤー版

W.A.モーツァルト(1756-1791)が短い生涯の最晩年に作曲を始めたのですが完成に至らず(III統唱の第6曲《涙の日(Lacrimosa)》の8小節目で中断)、その構想をもとに弟子のジュースマイヤーが補筆して翌年(1792)に完成させました。

《レクイエム》という題名は「安息」を意味する冒頭の言葉からとられたもので、「死者のためのミサ」で捧げられる祈りの式文をテキストとしています。魂は死後も不滅であると説くキリスト教では、亡くなった方の魂が平安のうちに天国に行くことができるようにと祈るものです。但し、歴史上《レクイエム》の式文は「ミサ通常文」のように確定されてきたわけではないので、テキストを選んだ作曲家によって若干の違いがあります。

「安息」や「憐れみ」を願う《レクイエム》になぜ《怒りの日(Dies irae)》や《呪われた者(Confutatis)》といった激しく暗いイメージが登場するかというと、中世に広まった「煉獄」の思想があった[注6]からです。この煉獄のイメージは「最後の審判」[注7]のイメージとも重なり、《レクイエム》はこの世を生きている人々自身の安息への祈りともなっています。

モーツァルトはこのようなテキストを、劇的にそして美しく音楽化しました。聴き手も歌い手ともに、深い祈りへと導かれていきます。

2011 06/08

[注1]…人間は生まれながら、アダムとエヴァに起因する罪をもっている、というキリスト教の思想。

[注2]…バッハにおいては、宗教的な歌詞による合唱曲であり、葬儀や追悼式等の特別な機会のために作曲され演奏されたもの。

[注3]…回心したパウロがローマの信者にあてて書いたとされる手紙で、新約聖書を構成する一つの文書。

[注4]…多くの声部が同じリズムで進み、主に和音の変化が音楽の推進力となるような作曲の方法。

[注5]…リズム的に独立した声部が、追いかけてこのようにして音楽を進めていくような作曲の方法。「多声的」とも。

[注6]…「煉獄」とは、地獄に墮ちるほどの罪はないが天国に直行できるほど清くはない魂がその罪をあがなうために留まるとされる場所。プロテスタントは当初から、カトリックでも20世紀後半になってこの「煉獄説」を認めないこととなりました。

[注7]…新約聖書の『ヨハネの黙示録』に示されているキリスト教の終末観で、この世の終わりに神が現れて人々を裁き(審判し)、罪ある者は魂の死を、罪無き者は天国を与えられるというもの。



大中寅二
主よわれをあわれみ給え

なやましきわが心、
むせび泣くわが思い。
花の枝せよく朝も、
草の葉のねむる夕も、
罪のかげくらく蔽えば、
わが心ひとりさまよう。

人の子と生まれ来て、
さびしみて世を過ぐる。
人恋うる恋すらも、

罪のかげ宿らざるなし。
よろこびの笑みすらも、
ひそかには、かなしかりけり。

さまよえる罪の子われを、
キリストよ、あわれみたまえ、
くらきかげ蔽える道を、
キリストよ、みちびきたまえ。
主よわれをあわれみたまえ。
主よわれをあわれみたまえ。

J.S.Bach
Der Geist hilft unser Schwachheit auf

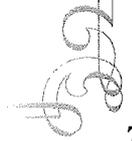
Der Geist hilft unser Schwachheit auf,
denn wir wissen nicht,
was wir beten sollen, wie sich's gebühret;
sondern der Geist selbst vertritt uns
aufs beste mit unaussprechlichem Seufzen.
Der aber die Herzen forschet,
der weiß, was des Geistes Sinn sei;
denn er vertritt die Heiligen
nach dem, das Gott gefällt.

Du heilige Brunst, süßer Trost
Nun hilf uns, fröhlich und getrost
In deinem Dienst beständig bleiben,
Die Trübsal uns nicht abtreiben.
O Herr, durch dein Kraft uns bereit
Und stärk des Fleisches Blödigkeit,
Daß wir hie ritterlich ringen,
Durch Tod und Leben zu dir dringen.
Halleluja, halleluja.

J.S.バッハ
御霊はわれらの弱きを助けたもう

霊が弱い私たちを助けてくれます、
私たちは知らないのですから、
何を祈るべきか、どう祈ればふさわしいのか。
しかし霊は自ら私たちのために
言い表せないうめきをもって最良に執りなしてくれます。
人々の心を見抜くことができる方、
その方は霊の思いが何かも分かっています。
霊は聖なる人々のため 神の意に適うように
執りなしてくれるのですから。
(『ローマ人への手紙』第8章26節～27節)

聖なる情熱、甘き慰めよ、
今こそ私たちを助けてください、喜び、安心して
ずっとあなたへ仕えていただけるように、
この苦難が私たちを押し流すことがないように。
おお 主よ、あなたの力で私たちを整え、
愚かな肉を強くしてください。
私たちがここで勇敢に戦い、
生と死を通してあなたのもとへ進んで行けるように。
ハレルヤ、ハレルヤ。
[Martin Luther作のコラール
«Komm, Heiliger Geist, Herre Gott»第3節]



W.A.Mozart
Requiem

I. Introitus
Requiem aeternam

Requiem aeternam dona eis Domine:
et lux perpetua luceat eis.

Te dectet hymnus Deus in Sion,
et tibi reddetur votum in Jerusalem.
Exaudi orationem meam,
ad te omnis caro veniet.

Requiem aeternam dona eis, Domine
et lux perpetua luceat eis.

II. Kyrie

Kyrie eleison,
Christe, eleison,
Kyrie eleison.

III. Sequenz

Nr. 1 Dies irae

Dies irae, dies illa
solvat saeculum in favilla
teste David cum Sibylla.

Quantus tremor est futurus,
quando iudex est venturus,
cuncta stricte discussurus!

Nr. 2 Tuba mirum

Tuba mirum spargens sonum
per sepulchra regionum,
coget omnes ante thronum.

Mors stupebit et natura,
cum resurget creatura,
judicanti responsura.

Liber scriptus proferetur,
in quo totum continetur,
unde mundus iudicetur.

モーツァルト
レクイエム

I. 入祭唱
永遠の安息

主よ、永遠の安息をこの人々に与えてください、
絶えざる光が彼らを照らしますように。

神よ、シオンでは讃歌こそあなたに相応しく、
エルサレムではあなたへの誓いが果たされます。
私の祈りを聞き入れてください、
すべての肉はあなたの下へと還るでしょう。

主よ、永遠の安息をこの人々に与えてください、
絶えざる光が彼らを照らしますように。

II. 憐れみの讃歌

主よ、憐れみください、
キリストよ、憐れみください、
主よ、憐れみください。

III. 続唱

Nr.1 怒りの日

その日は怒りの日
世界は灰燼と帰される
ダヴィデとシビラの預言のとおり。

どれほど怖れおののくことになるだろう、
すべてを厳しく打ち砕こうと
裁き主がやって来る時には!

Nr.2 不思議なラツパ

不思議なラツパの音が
各地の墓に響き、
すべての人を玉座の前に集める。

死も自然も驚く、
被造物が甦り
裁き主に応えようとするのだから。

一つの書物が差し出される、
そこにはあらゆる事が記されており、
それによって世界が裁かれる。

Judex ergo cum sedebit,
quidquid latet apparebit:
Nil inultum remanebit.

Quid sum miser tunc dicturus?
Quem patronum rogaturus?
Cum vix justus sit securus.

Nr. 3 Rex tremendae

Rex tremendae majestatis,
qui salvandos salvas gratis,
salva me, fons pietatis.

Nr. 4 Recordare

Recordare Jesu pie,
quod sum causa tuae viae:
ne me perdas illa die.

Quaeens me, sedisti lassus:
redemisti crucem passus:
tantus labor non sit cassus.

Juste judex ultionis,
donum fac remissionis,
ante diem rationis.

Ingemisco, tamquam reus:
culpa rubet vultus meus:
supplicanti parce Deus.

Qui Mariam absolvisti,
et latronem exaudisti,
mihi quoque spem dedisti.

Preces meae non sunt dignae:
Sed tu bonus fac benigne,
Ne perenni cremer igne.

Inter oves locum praesta,
et ab haedis me sequestra,
statuens in parte dextra.

それゆえ 裁き主が座に就けば
隠されていたことはすべて明らかになり
報いを受けずに済む者はない。

哀れな私がある時 何を言えるだろう?
誰に護ってもらえるだろう?
義人でさえ安らかでいられないのに。

Nr.3 恐るべき王

威厳ある恐るべき王よ、
恩寵により 救われるべき者を救う方よ、
私を救ってください、慈しみの泉よ。

Nr.4 心に留めていてください

心に留めていてください、情け深いイエスよ、
あなたの再臨が何のためであるのか。
その日に私を滅ぼさないでください。

私を捜し、あなたは疲れて腰を下ろしました。
十字架の苦しみを受け、人々の罪を贖いました。
これほどの労苦が無駄になりませんように。

報いをもたらす正しき裁き主よ、
赦しの恩寵を与えてください、
弁明の日の前に。

罪人のように私はうめき、
自分の罪で顔を赤らめます。
神よ、乞い願う者を見逃してください。

マリアを赦し、
盗人の願いを聞き入れ、
私にも希望を与えてくれた方よ。

私の祈りは不相応なものです。
しかし 優しく恵みを施してください、
絶えざる炎で私が焼かれることがないように。

羊の中に私の居場所を与え、
山羊からは遠ざけてください、
あなたの右側に私を立たせてください。

Nr. 5 Confutatis

Confutatis maledictis,
flammis acribus addictis,
voca me cum benedictis.

Oro supplex et acclinis,
cor contritum quasi cinis:
gere curam mei finis.

Nr. 6 Lacrimosa

Lacrimosa dies illa,
qua resurget ex favilla
judicandus homo reus:

Huic ergo parce Deus.
pie Jesu Domine,
Dona eis requiem.

Amen.

IV. Offertorium

Nr. 1 Domine Jesu

Domine Jesu Christe, Rex gloriae,
libera animas omnium fidelium defunctorum
de poenis inferni,
et de profundo lacu;
libera eas de ore leonis,
ne absorbeat eas Tartarus,
ne cadant in obscurum.
Sed signifer Sanctus Michael
repraesentet eas in lucem sanctam,
quam olim Abrahae promisisti
et semini ejus.

Nr. 2 Hostias

Hostias et preces tibi,
Domine, laudis offerimus.
Tu suscipe pro animabus illis,
quarum hodie memoriam facimus.
Fac eas, Domine, de morte transire ad vitam,
quam olim Abrahae promisisti
et semini ejus.

Nr.5 呪われた者

呪われた者が口をふさがれ、
激しい炎に身を焼かれる時、
祝福された者たちと共に私を呼んでください。

ひれ伏し、乞い願いながら私は祈ります、
打ち砕かれ、灰のようになった心で。
私の最期を取りはからってください。

Nr.6 涙の日

それは涙に暮れる日、
裁かれるために罪ある人が
灰の中から甦る日。

ですからこの人は赦してください、神よ。
慈しみ深き主 イエスよ、
彼らに安息を与えてください。

アーメン。

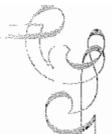
IV. 奉献唱

Nr.1 主 イエス・キリスト

主 イエス・キリスト、栄光の王よ、
死せる信徒すべての魂を解き放ってください、
地獄の罰と、
深き淵から。
魂を獅子の口から救い出してください、
冥府に飲み込まれることも、
暗闇へ陥ってしまうこともないように。
旗手 聖ミカエルが
それらを聖なる光へと導いてくれるように、
かつてあなたがアブラハムと
その子孫に約束したように。

Nr.2 讃美の供物と祈り

讃美の供物と祈りを、主よ、
私たちはあなたに捧げます。
受け入れてください、
今日、わたしたちが記念している魂のために。
主よ、彼らの魂を死から生へと移してください。
かつてあなたがアブラハムと
その子孫に約束したように。



V. Sanctus

Sanctus, sanctus, sanctus
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra gloria tua.
Hosanna in excelsis.

VI. Benedictus

Benedictus qui venit in nomine Domini.
Hosanna in excelsis.

VII. Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
dona eis requiem.

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
dona eis requiem.

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
dona eis requiem sempiternam.

VIII. Communio

Lux aeterna

Lux aeterna luceat eis, Domine:
cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.
Requiem aeternam dona eis Domine:
et lux perpetua luceat eis.

Cum sanctis tuis

Cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.

V. 感謝の讃歌

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
万軍の主なる王は。
天と地はあなたの栄光に満ちています。
いと高き所にオザンナ。

VI. 祝福がありますように

主の名において来る方に祝福がありますように。
いと高き所にオザンナ。

VII. 神の子羊

神の子羊、世の罪を取り除く方よ、
この人々に安息を与えてください。

神の子羊、世の罪を取り除く方よ、
この人々に安息を与えてください。

神の子羊、世の罪を取り除く方よ、
この人々に永遠の安息を与えてください。

VIII. 聖体拝領唱

永遠の光

主よ、永遠の光が彼らを照らしますように、
あなたの聖人たちと共に永遠に、
あなたは慈しみ深いのですから。
主よ、永遠の安息をこの人々に与えてください、
そして絶えざる光が彼らを照らしますように。

あなたの聖人たちと共に

あなたの聖人たちと共に永遠に、
あなたは慈しみ深いのですから。



“Oro supplex et acclinis” ～ 「海を渡ってくるもの、空を越えてくるもの」

指揮者 佐々木正利

『椰子の実』

名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ
故郷(ふるさと)の岸を離れて 汝(なれ)はそも波に幾月
旧(もと)の木は生(お)いや茂れる 枝はなお影をやなせる
われもまた渚を枕 孤身(ひとりみ)の 浮寝の旅ぞ
実をとりて胸にあつれば 新たなり流離の憂
海(うみ)の日の沈むを見れば 激(たぎ)り落つ異郷の涙
思いやる八重の汐々 いずれの日にか故国(くに)に帰らん

島崎藤村の詩による『椰子の実』は、藤村の親友であった柳田國男が、愛知県の伊良湖岬の突端に滞在していた時、「風の強かった翌朝は黒潮に乗って幾年月の旅の果て、椰子の実が一つ、岬の流れから日本民族の故郷は南洋諸島だと確信した」といった話を藤村にし、その話にヒントを得て「椰子の実の漂泊の旅に自分が故郷を離れてさまよう憂い」を重ね、1898年に書かれたものだそうですが、その38年後にNHK大阪放送局が『国民歌謡』として大中寅二に作曲を依頼し、今でも広く愛唱されているエキゾチックな叙情歌として親しまれています。

作曲者の「大中寅二」という名は、私にとりまして滝廉太郎や山田耕筰と同様に、歴史上の大作曲家の位置づけで捉えておりましたので、ごく自然に何の違和感もなく、大中寅二と呼び捨てにしておりましたが、実は、本日オルガンを弾いて下さる飯靖子先生が、オルガニスト兼聖歌隊指揮者として務めておられる日本基督教団霊南坂教会（東京都港区赤坂）に、この大作曲家の奥様（大中香代様）がおられたのです。しかも現役の聖歌隊員であられ、

私も何度か指導させて戴いたものでしたが、その奥様の前で呼び捨てにすることの違和感（戸惑い）はまったく想定外のことでした。

大中寅二は、飯先生の二代前の霊南坂教会オルガニスト兼聖歌隊指揮者で、在職中多くのオルガン曲、宗教曲を書かれましたが、奥様の香代様はその膨大な遺作の中から、いずれかの機会に主人の曲を演奏して下さい、と数十曲私に託されました。私は、これまで日本人が作った宗教曲を演奏したことがありませんでしたので、いつかは取り上げたいと思っていましたが、この度「東日本大震災の犠牲者に捧ぐチャリティーコンサート」に正にふさわしいと、その中から交声曲『我をあわれみ給え』を演奏させて戴きたいと思いました。しかしてそのことを香代様にお伝えしましたならば、感謝なことにすぐに無償で楽譜を120部寄付して下さいました。本日前半のステージでは、「主よ、あわれみ給え」と祈りを捧げた後、間髪を入れずにバッハのモテット「御霊は我らの弱きを助けて下さる」を続け、救済の願いと確信を歌い上げたいと思います。



椰子の実は、風によって黒潮に乗り、遙か離れた南の島より流れ着きました。実は、私たちが日頃歌っている賛美歌も、同じような流れで日本に入って来たことをご存知でしたか。音楽教育学者の安田寛氏（奈良教育大学）によりますと、日本を含めた太平洋全域において、賛美歌が普及することになった要因は、19世紀に盛んであった捕鯨活動にあったのだそうです。即ち、捕鯨という経済活動とキリスト教宣教という宗教活動は、不即不離の関係にあったというのですね。イギリスやアメリカを出発した捕鯨船隊は大西洋を南下し、ケープホーンを回ってチリの西海岸沿いを北上、赤道近くに至ると船首を西に向け太平洋の奥へと進みました。そしてガラパゴスからギルバート諸島、エリス諸島まで赤道に沿ってまっすぐ伸びる海域、ここがマッコウジラの多く集まる捕鯨場でありました。そのマッコウジラが北上するのを追って、船はいわゆるジャパングラウンドに入って来ます。船には捕鯨関係者だけでなく、彼らの礼拝を守る宣教師も乗っていましたし、船自体が彼らの郵便船でもあり、また生活に必要な物資を運ぶ役目もありました。日本に迫った彼らが、新鮮な食材を求め、水を補給するために上陸するのもごくごく自然なことです。そう、南からやって来た船団によって賛美歌は日本上陸を果たしたのです。

私は日本の賛美歌が好きです。ですからよく歌います。でも、私同様に宗教音楽の虜になっている方の大半が、賛美歌には二の足を踏む傾向があるようです。横文字で書かれ芸術的色彩が豊かな宗教音楽はいいけれど、シンプルでことばもストレートに反映される日本語の賛美歌は、宗教音楽として生々しいと、少々斜めに構えてしまうのかもしれない。しかし本来は、レクイエムもカンタータもオラトリオも賛美歌なのですから、意味・内容も分からないで歌う人たち以外は、とっくにアレルギーから解放されてしかるべきことなのではないでしょうか。

60才代以上の方ならご記憶にあると思いますが、我が国で初めて「米国からの衛星中継」が始まり、そのため

の実験放送が流れるというので、TVの前で待っていた人たちの目に最初に入って来たのは、突拍子もない「米大統領J.F.ケネディの暗殺」のニュースでした。1963年11月23日のことです。確かその時のことではなく、後になってのことだったと思いますが、葬儀の音楽としてモーツァルトのレクイエムが演奏される光景を、音と映像で私も見るようになりました。この演奏はボストン交響楽団をエーリッヒ・ラインスドルフが指揮したものでしたが、後に2枚組のLPレコードとして発売され、大変な感動を呼び起こされた記憶があります。なぜなら、このレクイエムは、音楽としてだけでなく本来のミサの形式に則って演奏されたものでしたので、あらためて宗教音楽は実用音楽なのだと思わされました。

このケネディの暗殺の3年半前、1960年5月23日、南米・チリ共和国でマグニチュード9.5という世界最大規模の途轍もない地震が発生しました。この地震直前にM7~7.5の前震と思われる地震が数回続き、その後本震が発生したそうですから、今回の大地震と似ています。この地震により首都サンティアゴをはじめ、チリ全土で大きな被害が出ましたが、断層の長さ約800km、断層のずれ約20kmのプレート境界型地震により、巨大な海底変動が起き大津波が発生します。地震発生15分後に約18mの津波がチリ沿岸部を襲い、約17時間後には約11mの津波がハワイ諸島を、23時間後には数メートル以上の津波が日本を襲いました。約50年前に辛酸をなめたはずの日本人が、なぜ今回の大地震による津波災害を避けられなかったのか。無念でなりません。記憶はどんどん薄れていくものですが、記録に残しただけでは感情の動きが廃れます。辛くても記憶をしっかりと呼び戻せる危機管理作りが大切だと思います。

今回の地震や津波に被災されたみなさんには掛けられることばもありません。いま何をすべきか、何ができるか、みなで考えよう、といったフレーズが巷を賑わしています。でも私には、音楽しか、歌しかないからとはいっても、果たして私たちの歌声がみなさんの生きる希望につながるこ



とになるのか、明日へ頑張る励ましのメッセージになれるのか、嘔と自信がありません。そんな中、合唱団の中から自然発生的に、被災された犠牲者の魂のために祈るコンサートをやろうといった機運が高まりました。我がフェラインは、もともと5月の初めには、ドイツはローテンブルク音楽祭で、モーツァルトのレクイエムを演奏する予定になっていましたので（大震災の影響で渡独できなくなりました）、亡くなった方の魂の救済のために、レクイエムを歌って神さまに祈ろうと思いました。

ドイツで、モーツァルトのレクイエムを指揮して下さることになっていた盟友 G.シュマールフスさんも、来年3月、氏が音楽監督を務める台湾のエバー交響楽団とマーラーの交響曲第2番「復活」を共演して追悼しようと励まして下さり、また昨年12月に東京フィルハーモニー交響楽団との第九を指揮して下さった D.エッティンガーさんからも温かい励ましのメッセージを載っています（そのステージと一緒に乗った岩手大学教育学部附属小学校合唱部は、本年8月、東京オペラシティで行われる東京フィルの第九に、東京オペラシンガーズ、東京少年少女合唱隊と共に乗ります）。こうした励まし（いや本当はこちらが励まされなければならぬのですが）に支えられて、しっかり演奏しようと団員とスクラムを組み直すと共に、被災された田老、釜石、大船渡、陸前高田の仲間たちに我々の心をお伝えしたく、何人の方でも聴きにきて下さいとメッセージを発信しました。もし会場にお越しになられていましたならば、心をひとつにして犠牲になられた方々の魂のために、今一度お祈りしましょう。

椰子の実も賛美歌もチリ地震津波も南方から海を渡ってやって来ました。ケネディ暗殺は東の空から、シュマールフスとエッティンガーのメッセージは西の空から時空を越えてやって来ました。そして東日本大震災津波は、東の海から容赦なく沿岸に襲いかかりました。それらがすべて神さまのご計画だったとしたなら、人間は良くて悪くても受け入れるしかありません。何年かかっても受け入れて学ぶしかありません。謙虚になって学ぶこと、それが人間には宿命づけられているような気がします。TBS（IBC）のドラマ『仁』で語られる「神はその人間が耐えられる試練しか与えない」が本当であるなら、いま私たちができることは、己に与えられた使命を一生懸命果たすことではないでしょうか。そう信じてタクトを降ろします。

でも神さま、津波だけは勘弁して下さい。良い人も悪い人も、御心にかなう人も背く人も、根こそぎ持って行くような大津波だけは勘弁して下さい。私たちは弱いのです。祈り歌うことしかできないのです。しかし、こうした試練が私たちに必要であるなら、神さま、御心のうちに私たちに備えをなすよう導いて下さい。御前にひれ伏しへりくだりつつ祈ります（“Oro supplex et acclinis”）。

【典礼ミサ】 1.入祭唱 (Introitus) 2.あわれみの賛歌 (Kyrie) 3.入祭祈願 (Oratio) 聖書朗読 (Lectio) 5.昇階唱 (Graduale) 6.詠唱 (Tractus) 7.続唱 (Sequentia) : 怒りの日 (Dies Irae), 不思議なラッパ (Tuba mirum), みいつの大王 (Rex tremendae), 思い出せ給え (Recordare), 呪われた者は (Confutatis), 涙の日 (Lacrimosa) 8.福音書朗読 (Evangelium) 9.奉納唱 (Offertorium) : 主なるイエス (Domine Jesu), いけにえの賛歌 (Hostias) 10.叙唱 (Praefatio) 11.感謝の賛歌 : 聖なるかな (Sanctus), 祝せられ給え (Benedictus) 12.主の祈り (Pater Noster) 13.平和の賛歌 (Agnus Dei) 14.聖体拝領唱 (Communio) 15.聖体拝領祈願 (Postcommunio) 16.閉祭の祈り (Requiescant in pace)